

氏名	大橋 文男
ヨミガナ	オオハシ フミオ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第496号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 風習とアート —風習儀式の形態化に近づく構造— 〈作品〉 なく家

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小山 穂太郎
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	坂口 寛敏
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	保科 豊巳
（副査）	三菱一号館美術館	学芸員		野口 玲一

（論文内容の要旨）

世界中に、風習がある。日本の各地にも数多くの風習がある。その行為伝承は客観的に見ると不思議でならないものばかりである。どうしたらこの様な奇怪で摩訶不思議なことになってしまったのかと思ってしまうものが多い。そして当事者達はいたってその行為を大真面目に楽しみながら行っている。

世界中に、美術がある。日本各地にも数多くの美術がある。その展示行為は客観的に見ると不思議でならないものばかりである。どうしてこの様な奇怪で摩訶不思議なことになってしまったのかと思ってしまうものが多い。そして当事者達はいたってその行為を大真面目に楽しみながら行っている。

今、地方に多くの特色をもつ「風習」は人口の急激な減少により保存継承が非常に困難になってきている。日本全土で村自体が劇的に消滅しているからである。村では一人暮らしの老人ばかりである。こぼれ落ちた民俗学の宝庫がひっそりと暮らしている。人は宝庫の箱である。そこを開ければ宝物があるはずである。宝庫を失う前に私たちは宝物を保管する必要がある。それは何も日本の過疎地だけの現象ではない。都市にもやはり多くの老人が一人で暮らしている。都市の独居老人（都市出身者もいれば地方出身者もいる）の増加である。若い世代においても本人が望むように個人化が急激に進んできている。このような現状での「風習」はどのような状況になっているのか。個人が拡散する中で、地方出身の個々人はその地の「風習」を携え散り、都会に住む（地方都市も含め）若き個々人は新しき小さな「風習」のような儀式を見つけ出す。女の子は個人の「風習」儀式を編み出し密かに行っている。コミュニティーを介さない個人の「風習」儀式の現象化が起きている。それを私は「自己風習」と呼ぶ。内容は「縁起担ぎ」から「おまじない」や「お祈り」、身体の「くせ」や頭の中での「風習的思考」などのことをいう。インターネットで個々人は擬似村のようなコミュニケーションを日々作り壊す。アニメの物語やゲームには不思議な「風習」が現れる。新しき「風習」が生まれ密かにあちこちで生息し変態し生き繋いでいる。まるで人に寄生し生きているかのように。それはウイルスのように。それは恐れであり畏怖の念といった潜在意識に感染する。「風習」という文字を纏いながら、よりいっそう呪術化を増してきている。

私の自作「森と歩く人」（2011年制作）は、認知症にある身内の者を看っていく中で作品化に結びつけたものである。彼女は認知症により意識をもって話すことはできない。記憶も定かではなく歩くことも全くできず一日をベッドの上で寝ている。時々ふと言葉を発する。その言葉はほぼ単語のみである。

“ばなな くるま さざんか つえ とりのす”

丸一日発しないことも多い。しかしその時々発する声が私の心に響いてきたのである。その声を聞いてか

らはこの声を残したいと思うようになり、寝ている彼女の枕元に録音機を置き何ヶ月もかけて言葉を採取した。身内の認知症の介護を通して「死」と「記憶」のコンセプトのもと、映像インスタレーションを制作したのである。しかしその表象の中に

〈どこかの「風習」儀式の要素〉

が、その意図はなく表出してきたのである。それはどのように現れたかという、時間をかけて採取した言葉を作品の中で二つの設定に落とし込んだものから現れてきた。一つは彼女が発した言葉を彼女の持ち物から捜し出し彼女の寝ている上に無数に吊るす。もう一つの設定は、やはり彼女が発した言葉の物を白い紙で切り取り出し、それをまた彼女の寝ている上に膨大に吊るしたのである。吊るすことで、彼女が死の世界でもなく、しかし死に一番近い世界の中に入り込んでいるところを彼女が見ているように、私もその世界を少しでも覗けるのではないかという思いからである。それを映像として作品化した。この二つの設定場面は二種類の具現化した物を無数に吊るすことで、それは「マンガの吹き出し」のような型をとり、まるで彼女が見ている世界の内容を語らせるようにしたのである。そして、この作品を観た何人かに“どこかの「風習」儀式のようなものがありましたね”と言われたのである。「マンガの吹き出し」に模した設定が、〈どこかの「風習」儀式〉の形態に近いものを観者が感じとってしまう作用を引き起こしてしまったということになる。本論文は、〈風習とアート〉-風習儀式に近づく構造-というタイトルで、「風習」を並走させながら自作論を論じるものである。

第一章は「風習」とは何かを探りながら、美術的解釈で「風習」を概念化させる。第二章は「自作」と「風習」と「現代アート」を交差させながら自作を論考する。第三章は現代の「風習」を都市と地方からの事例を挙げ、〈風習とアート〉を考察する。結びは本論の意義と今後の制作と同時に行動の可能性と展開を述べて結ぶ。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、現代アートのジャンルで作品制作をしている大橋文男（以下では「筆者」と表記する）が、日本の各地に残る風習を調査し、そこに現れた造形物や身振りなどと、現代アートとくに筆者自身の作品とを比較考察し、新たな表現を探ろうというものである。なお筆者は、石川県の能登半島の出身で、それゆえにここで取り上げる風習は、その郷里である能登半島に今も残るものが研究対象の中心となる。

本論文は「風習とアート -風習儀式に近づく構造-」は、まず「1-1 風に習う」において、風習と言う語を「風」と分解するところから始まるが、筆者は自身に作品において、風や光などの自然現象を重視し、それを映像作品やパフォーマンス作品のなかに丁寧に拾い上げている。かすかな風が吹くときの、感覚の研ぎすまされ方を映像に記録し、そこに風習というものとその語が孕んでいた意味を探り出そうと、風習の世界にアプローチするところから、この論文は始まる。さらには、鉦を叩いたり、奇声を発したりという、筆者が幼いことから見てきた、能登半島における風習に言及しながら、クリスト&ジャンヌ＝クロード、折元立身などの作品を取り上げ、現代のアートにみられる「風習的」な表現を、自身の作品紹介と絡めながら論じていく。さらに三章においては、雨乞い、虫送り、持病送りなど「ムラ」的な世界における共同祈願などの風習を取り上げ古来より続いて来た「祈り」という人間の心の世界についても論を及ばせ、いわば風習というものが孕んで来た心のケアの問題が、美術というもう一つの心の世界が探究してきた技とのつながりを見いだそうとする。

筆者は、本論文と同時に提出された博士展作品において「なく家 ナクイエ」というインスタレーション作品を展示し、そこに風習を感じさせる、風や光などさまざまな自然や土俗の気配にみちた世界を現出させたが、また折口信夫の「まれびと」を想起させるような、土地の人々が仮装し田舎の台所や海辺を彷徨う映像作品も上映した。それらインスタレーション、パフォーマンス映像などという現代美術の手法を用いながら、それを古来よりの「風習」とつなぎ合わせた。

筆者は、現代アートの未来を切り開く術を、古来よりの風習というものに求め、それとの接続によって、新しいアートや、あるいは風習儀式の見直し・再発見をも試みる。最先端の科学テクノロジーや、インターネットなどの新しい人間社会のありようばかりに熱い眼差しが向けられる現代において、このような古来よ

りの「土」に根ざしたような世界に目を向ける筆者のような視点は、かえって新鮮であり、とても現代的・未来的ですらあるとも評価できる。古いものと新しいものを結びつけようとする筆者の作品と論文は、その意味で貴重な試みである。その独自の試みは高く評価でき、よって「風習とアート -風習儀式に近づく構造-」を博士論文として合格とする。

(作品審査結果の要旨)

申請者は様々な地域において風習を介した美術活動を実践してきた。「風習とは分からないもの、目に見えないもの、言葉にうまく表わせないけれど大事なものであり、例えば死や恐怖や記憶に形を与えるものである。それらは地域の共同体により作られてきたものが世代にリレーされたものだ」と申請者は言っている。

今回の提出作品「なく家」の構成は、木製家型作品と2映像作品から成っている。「なく家」の「なく」とは不在や喪失の意味と共に物や生き物が音を出し、人が声を立てることまでの多様な意味を包含している。その木製家型作品「なく家」は、石川県七尾にある申請者の木造りの実家が、乾燥や雪の重み等により木材が反ったり戻ったりすることで軋む音を聞きながら育った体験から作り出された。当地の大工用語で“木がなく”ということからも題名が引き出されている。鑑賞者は板壁の隙間から内部空間を覗き見ることができ、その場に差し込む自然光と内部の紗状スクリーンの層に映像が絡み合い、光の揺らめきや大気の流れを感じる事ができる。一番目の映像作品「なく家」は、「家」に何らかの問題を抱えた人びとを登場させ、廃屋には鬼が住むと言う設定で作られた。登場人物達は、輪島の「御陣乗太鼓」と言う3体の鬼のお面の写真を細長く切ったものを編み込んで1体にした「鬼」の被りものを被り、被った頭部が揺れる「身体風習」の動きを演じている。二番目の作品は、今まで制作した映像作品群を総集編し映像インスタレーションしている。

申請者の作品創作は、個人が抱える家族や家の現実問題、社会化する空き家問題、視覚化された「泣く家」を組み合わせたものから成り立ち、そこには「生と死」「記憶」「風習」の内化が見て取れる。申請者の風習を介する創作活動は、根気強く地域の特性をリサーチし、労を惜しまないアプローチで地域の人びとと新しいコミュニケーションを築き上げている。その創作活動は、非常に評価される。申請者の創作活動のコンセプト「風習と美術」と言う概念は、その括りが大き過ぎ捉えるきらいはあるが、40代に入学し作品を作り始めた申請者の大らかな美術活動が、現代の都市や若い世代に潜む風習儀式等と関わって独自の美術表現を見出して行くであろう事を大いに希求する。

申請者の研究領域は、インスタレーション作品及び映像作品の新しい地平を開くものとして審査メンバー全員の評価が一致し、合格とした。

(総合審査結果の要旨)

大橋文男が生まれ育った石川県能登地方には奇妙な風習があると云う、「アエノコト」と呼ばれ古くから伝わる新嘗祭の一種であろう、日本各地では似た様な風習が各地にあるが、その土地固有のものが大多数である。どうしてこんなことになってしまったのかと、大橋は考える。それらの奇怪で摩訶不思議な様に魅せられたのであろう、その由来に思いを巡らせながらも、自身の制作の中に風習にあるような行為や形が無意識的にも選びとられてきた。そして、大橋は自らも「自己風習」と言い出し始めた。「自己風習」を祈り唄い踊りたいと思い始めたのである。

大橋の論文題目は、「風習とアート -風習儀式に近づく構造-」である。第一章は「風習」とは何かを探りながら、風習の世界にアプローチするところから、この論文は始まり、美術の立ち位置から「風習」を論考し概念化させる。第二章は「自作」と「風習」と「現代アート」を交差させながら自作を論考する。第三章は現代の「風習」を都市と地方から探り事例を挙げ、〈風習とアート〉を考察し、あるいは風習儀式の見直し・再発見をも試みる。そして本論の意義を述べ、制作と同時に今後の活動の可能性と展開を述べていくものである。

大橋の制作の重要な契機に、認知症を発症した身内の者の介護に関わったことがあると云う。寝たきりの状態になりながら時々ポツリと短い単語を発する、まるで深い記憶の森の中に入って戻ってこなくなるので

はないかという頃に、寝たきりの身内の側に寄り添ってその言葉を拾い集めた「森と歩く人」2011年制作の作品がある。拾い集めた言葉を白い紙で形を切り取り部屋の中に吊り下げていくものである。まるで民俗学の「心の採集」のようであったと大橋は語る。同時に身内の者の持ち物から言葉にあった者を探し、それらも糸に結んで吊るした。それはどこかの風習儀式で見たようなものであった。そこでは死でもないそれでも死に限りなく近い透明な狭間が作れたような気がする。その後、様々な自己風習と言って良い試みが成されてきた。

今回の博士作品では「なく家 ナクイエ」では、映像作品2点と木造の家の形態の立体作品が皆同じタイトルで提示されている。様々な場所で鬼を探す試みをしてきた大橋は、ここでは廃屋に住む鬼を探している。人の住まなくなった古い家のなかで、その土地の人々が複数の鬼の面を織り込んだ被り物を頭に被り、ゆらゆらと身体を揺らしながら徘徊している映像作品である。家型の作品は木造の家が乾燥や積もった雪の重さで反ったり戻ったりする際に軋む音を発することを想定して作られている。自身の育った実家での体験が元にある。もう1点の映像作品は廃屋の佇まい、風や日の光と影のなかでゆらゆらと揺れるものが、過去の作者の映像作品を集め再編集して空間の片隅に置かれている。これは風習儀式になるというより、微かにそこにあるものの震え、存在をただ感じさせようとしているものである。

大橋の抱える「風習とアート」というテーマは、私たちの生活の変化や社会で起きる様々な現象、社会問題とも関わる、人間の営みを見守り、観察し、その土地の、その地域の人々の生活の変化をリサーチして見出してきたもので、たいへん独自で貴重な試みとして評価できる。博士作品と博士論文ともに審査メンバー全員が高く評価し、合格とした。